

II 主権者のための社会理論（理論社会学）

世界社会：世界中の人びとが全員でつくっている社会

世界社会と地球環境

地球社会：世界中の人びとと地球生態系でつくっている社会

これにたいして、地質学、そのなかの層序学の分野ですでに人新世 *anthropocene* という問題提起がおこなわれている、との指摘。

人間の活動が地質の層を変えてきている。1950 年ころから。

これはまさに、私の世界社会、地球社会概念と関係している。

地質時代 46 億年

冥王代 6 億年、始生代 15 億年、原生代 19.59 億年、顕生代 5.41 億年

古生代 2.89 億年、中生代 1.86 億年、新生代 0.66 億年

古第三期 4297 万年、新第三期 2044 万年、第四期 258 万 8 千年

更新世 257 万 6300 年、完新世 1 万 1700 年、人新世 *Anthropocene* 1950-

世界社会：世界中の人びとが全面核戦争が起これば絶滅しかねない運命を共有するようになった。

1975 年に提起。

世界社会の開始は広島・長崎に原爆が投下された 1945 年。

それとも、ソ連も核兵器を持ち、米ソ核軍拡競争が始まった 1949 年？

地球社会：地球的規模の環境破壊の進展により、人類が地球生態系のなかでそれと共に生きていることが明らかになった。

1989 年のマルタ会談により、米ソ冷戦が終結し、地球環境問題が一举に表面化した。実際にはそれ以前から進行していたが。

社会生態系。

それでは、そもそも社会とは何なのか？

世界社会、地球社会、などというものが存在するのか？

せいぜい存在するのは国際社会ではないのか？

社会は共同性 *communality* の実在と意識によって存在し始める。

NHK スペシャル「人類誕生」4 月 8 日

第1集「こうして人が生まれた」

アルディピテクス・ラミダス 440 万年前

第2集「最強ライバルとの出会い そして別れ」5月13日

ネアンデルタールとの関係

第3集「日本へ！ホモ・サピエンス 遙かなる旅」7月8日

人は共同性の実在を意識することによって社会を生き始める。

環節的社会から有機的社会へ：デュルケム

ただし、環節的社会の規模はこれまで考えられていたより大きいかもしれない。

夫婦と子供数人から成る家族が十数組あるいは数十組連結してなり立つ社会。

原始共同体

階層性の出現

原始共同体のなかに性別、年齢別、などによる階層性はすでに潜在的にある。

しかしそれは、皆が自然なものとして受け入れている。

これが顕在化するのには、原始共同体と原始共同体が衝突し、一方が他方を支配的に併合するとき。

弱い方の共同体の指導層は降伏するか除かれ、追従層は強い共同体の追従層の下に置かれる。下層か、奴隷に。

このような部族抗争をくり返して、社会は大きくなるとともに、高くなっていく。

いちばん分かりやすい例は、日本の戦国時代。

人種・民族と階層性。

階層化のさい、共同体あるいは社会同士の人種・民族——典型的には肌の色——が違っていると、階層性は眼に見える形で残りやすくなる。

古代インドのカースト制。近現代アメリカの人種差別。

人種・民族の違いが小さいと、階層化は典型に近い階級社会になる。

日本の例。ヨーロッパの例。封建制登場の原因。

中国では周代いらいの封建制と秦いらいの郡県制とが併用される。日本でも古代国家は郡県制を採用したが、武士層の台頭により、封建制に取って代わられた。

共同性と階層性の相克。

これによって社会の底辺はますます広がり、頂点はますます高くなる。

これが固定した場合が階級社会。

こう考えてみると、階級闘争一本やりの階級社会論は誤り。

市民社会が植民地・従属国をふまえて成り立ったことも、社会発展が征服・被征服をつうじて進展したことの証し。

しかし社会はいずれにしても、共同性と階層性の相克だけでは治まらない。

共同性は平等の意識を生み出し、階層性は不平等の意識を生み出すから、両者の葛藤から社会は不安定性を克服できないから。

そこで広がっていく共同性と高くなっていく階層性とを媒介する装置が必要になってくる。

この装置の代表的なものが宗教、国家、市場、都市。

これらに媒介されて社会は、たんなる階級社会ではなく、社会システムとなっていく。

社会システムは、平等性と不平等性とをうまく組み合わせて、できるだけ多くの人びと＝民衆を納得させる仕組み。

まず、宗教。

社会が拡大し階層化していく背景としては、すでに農耕と牧畜の普及がある。

そのずっと以前から人間は言語を用いたコミュニケーションをおこなっている。

言葉を用いて、人間は自然のなかで生きていること、個々の人は生まれてきて成長し、やがて死んでいくこと、社会はそれらを超えて存続していくこと、などを語っている。

認識力も実践力も弱いので、超自然的な力——神——を想定。

神がわれわれをこの地に使わし、誰それを指導者に、こう生きていけと教えたもうた。

神話とそれをテキストとする儀礼の発達——宗教。

宗教によって、拡大し高層化していく社会は、平等と不平等の矛盾を説明し、克服しようと努力しながら存続していく。

次に、国家。

社会が大きくなると、宗教のような語りと儀礼と納得だけでは済まなくなる。

何よりも他社会から自らを守り、時として他社会を攻撃して征服したりするための軍隊が必要。

軍隊を維持し、社会内部を管理していくための組織が家産官僚制。この組織は同時にそれを維持するための税を集める徴税機能を併せ持つ。

軍隊と家産官僚制が重なっていた時期。両者の長が王。のちに皇帝。

やがて両者が分離。武官と文官の分離。文官のほうが宗教の面を引き継ぐので権威は高

いが、実力では武官が上。そこで王あるいは皇帝は両者を兼ねようとする。

のちの文民統制の源流。

第三に、市場。

社会の拡大と高層化にともない宗教から国家への進化がおこなわれているあいだにも、社会では恒常的にモノとサービスのやりとりがおこなわれ続けていた。

互酬、(市場) 交換、再分配 (ポランニー)。

これらはすべて社会のなかに埋め込まれている。しかし、なかでも市場は自立して広がろうとする傾向。

そこで国家はこれを押さえ込み、自らの統制下に置こうとする。

門前町：宗教あるいは国家の宗教性が強いとき。

城下町：国家が市場を統制下において、社会を発展させようとする。

こうして都市が発達。

そこで第四に、都市。

都市こそが文明のカマド。

王は、都市を拠点として、社会の形態を都市・農村連合体としていく。

王と王とが争い、大きくなっていく社会システムの長が皇帝。

文明帝国の成立。

いわゆる四大文明の時代から、人類史は、原アメリカやアフリカも含めて、帝国の抗争と興亡の歴史。

1912 中華帝国の滅亡、1922 オスマントルコの滅亡、まで。

一次システムとしての帝国。

この過程をへて、

宗教→文化、国家→政治、市場→経済、都市→社会、で社会システムの四大下位システムができていく。

都市は他方で市民を生み出す。

農村部で生産されたモノを売り買いして生きていく商市民。

農村部で生産されたモノを素材に付加価値を持つモノを作り、生きていく工市民。

これらの市民はいずれも宗教を背景にもつ国家のきびしい統制のもとにあり、なかなか自立できない。

古代ギリシャのような帝国の統制が弛み自立した都市ポリスでは、半ば自立した市民が登場する。

ローマのような大帝国の中核都市では、皇帝の権力と権威を支えるだけの消費市民——パンとサーカス——も登場。

しかし、これらの市民は、みずから生産しなかったがゆえに滅亡。

11-12 世紀のヨーロッパで商業革命が起こり、貿易への意欲が高まる。

しかし、十字軍遠征（1095-1270、計 7 回）が失敗したうえ、イスラム帝国がつぎつぎと興り、東方への道が困難となる。

商人たちが意欲的な王たちの誘いに乗り、あるいは王たちを唆して、大航海時代を開いていく。

地中海からバルト海にいたる地域での商市民たちの活躍。

イギリスでは 16 世紀以降、毛織物を主とする工市民たちが登場。

両者あいまって、市民たちの力が強まってくる。

これに宗教改革・反宗教改革の影響。

17 世紀イギリスから市民革命の時代へ。

市民社会形成の過程で、

宗教は、その世界説明機能を科学に奪われていく。生死納得機能や生活指針機能はそう簡単ではないが、、

国家は宗教から切り離され、民主主義で運用されるようになる。

市場は、社会に埋め込まれていたのが自立させられ、世界中に広まる。それとともに、都市も世界に向けて自らを開放し、国内外を都市化し始める。

開放された都市に人びとが流入し、国語が形成され、国民意識が生み出される。

市民社会が国民国家を生み出す。

世界中に広げられた市場を基礎に資本主義が発達し、その主導権（ヘゲモニー）をめぐって有力国民国家が争うようになる。

16 世紀：ポルトガルとスペインの植民地づくりをつうじての世界制覇争い。

17 世紀：スペインから独立したオランダの北米、東南アジア、東アジアでの台頭。それを押さえ込みつつイギリス、フランスの植民地づくり争い。

18 世紀：市民革命をふまえた産業革命をつうじてのイギリスの世界制覇。

19 世紀：フランス、ドイツ、アメリカ、イタリア、ロシア、日本などの台頭。帝国主義時代。

20 世紀前半：中国、朝鮮半島、東南アジア、インド（南アジア）、中東、アフリカをめぐ

る覇権争い。ラテンアメリカは独立しながらもアメリカに従属。

20 世紀後半：中国、インド、朝鮮半島、東南アジア、南アジア、中東、アフリカの独立。新植民地主義、従属化がくり返されるも、植民地支配の終結。

21 世紀：ポストコロニアルな状態のなかで新興国の台頭が目立ち始め、ヨーロッパ、アメリカ、日本の地盤沈下が眼に見えるようになってくる。

ヨーロッパ、アメリカでのポピュリズムの台頭。自国防衛意識の強化。

日本ではそれらがまだ必ずしも顕在化していないが、朝鮮半島情勢をめぐる当事国から外されようとしている。

歴史意識を明確化できず、朝鮮半島、中国、アメリカ、ロシアなどに主体的な態度をとりえていないから。

二次システムとしての市民社会。

しかし、以上をつうじて、欧米日が誇りにしてきた市民社会が、帝国を崩壊させたものの、そのあとに残された社会を植民地あるいは従属国にして形成され、発展してきたことが明らかになった。

日本は台湾、朝鮮半島を植民地にし、中国東北部に傀儡政権を建て、そこから中国全土、東南アジア、インドにまで侵出しようとして反撃を受け、対アメリカ、太平洋にまで戦線を広げて大敗した経験、本土のほとんどの都市を爆撃され、沖縄で地上戦を戦って敗北し、それでも降伏しなかったため広島長崎に原爆を落とされて無条件降伏した経験から、征服者（加害者）と被征服者（被害者）の両面をもっており、この間の歴史をもっともよく理解できる立場にある。

自らの歴史体験と近現代世界の歴史体験とをつなぎ合わせ、欧米日が誇りにしてきた市民社会が世界中を植民地従属国にしつつ成り立ってきたことを明らかにして、日本の主権者のみでなく欧米日の主権者にも反省を促す役割。

朝鮮半島と中国から批判されてきている日本の歴史意識が、欧米の歴史意識にもつながるものであることを明らかにし、世界中の近現代史観の根本的欠陥について欧米にも反省を促す意義。

欧米日市民社会は、この意味で、植民地従属国体制という世界的規模の奴隷制をふまえたものであったのだから、いくらそれ自体が民主主義を普遍化してきた――普通選挙の普遍化、労働者その他一般国民への普及、少数民族への普及、女性への普及、などをつうじて――としても、なお民主社会としては不完全なものであること。

その意味で本当の民主化、民主社会化は、旧従属国・植民地のほとんどが独立したこれからの、21 世紀の課題であること。

その意味での世界社会、地球社会概念の提起。

全人類と地球生態系を含む最大社会の概念から、国際社会、国際地域社会、国民社会、

地域社会、の問題を考えていく。

Ⅲ 現代社会はどんな社会か？（現代社会学）

- 13 米ソ冷戦終結後の現実
- 14 電子情報市場化の進展
- 15 新帝国の出現と軍事帝国化
- 16 新興大国登場の意味
- 17 中東と北朝鮮：新常態が明らかにしているもの
- 18 20世紀を乗り越えられるか？

Ⅳ 主権者に何ができるか？（実践社会学）

- 19 生活と世界：立ち位置の確認
- 20 理論と方法：現代社会のマトリクス
- 21 問題と歴史：基礎となる歴史認識の共有
- 22 構造と意味：基本社会システムとしての民主社会
- 23 戦略と主体：共有戦略としての平和国家
- 24 総体と展望：主権者の民主協同社会へ